

# 暗黒騎士を脱がさないで

#エールリンク #OLになりたい #ダークデーモンドアの使い手

木村心一

---



ファンタジア文庫

2384

暗黒騎士さんに10の質問!



**Q1** 自分の長所と短所を教えてください。



暑さや寒さに強いところだろう。だが、扇風機で涼くなった気がしないところが短所だ。

**Q2** 好きな言葉は？



死中に活を求める。クリームシチューにカツを入れようという気概が好きだからだ。

**Q3** 最近の嬉しい出来事はなんですか？



オムライスのケチャップで似顔絵を描いて貰ったらケチャップの量が増えた。

**Q4** 最近の悲しい出来事はなんですか？



風呂の電球が切れた。

**Q5** スリーサイズは？



私の思う三大サイズはエクササイズ、A4サイズ、ももえサイズだな。

**Q6**

お風呂では、最初にどこを洗う？



当然、湯船だ。  
排水溝から洗う奴がいるのか？

**Q7**

いちばんハマっていることは？



見てわからんか？  
もしかして、今兜はちゃんとハマっていないのか？

**Q8**

得意技は？



暗黒波で奇襲したのち、暗黒斬りだ。

**Q9**

気分が落ち込んだときに何をする？



枕に暗黒波を放ったのち、膝蹴りだ。

**Q10**

好きな異性のタイプは？



赤い人。

……ありがとうございました！

## プロローグ「出会い頭の一撃」

春の陽気に当てられて、『鞍馬』啓治は揺れるカーテンの横で静かに佇んでいた。初めての学校生活。

小学校も中学校も行っておらず、ずっと山奥の屋敷に監禁されていた啓治にとって、教室の窓から見る景色は輝いて見えた。

家々の屋根やグランド端に並ぶ木々、道路へ舞い落ちる桜の花びら。

じつくりと、何度も往復して眺めてしまおう。

「どうした？ 可愛い子でもいたか？」

そんな啓治に、『辻本 豊』が声を掛けてきた。

細身の、スポーツが得意そうだと一目で分かるような、爽やかな少年だった。

「ん？ ああ、そうだね。みんな可愛い」

啓治は豊に一瞥すると、また窓の外に視線を投げ、今度は校舎へ入ってくる生徒たちに目を落とした。

同じ服を着た少年少女が、入学式を前に緊張していた。人は誰しも、仮面を被っている。

本当の自分を隠して生活をしている。

実は恋をしているアイドル。

実は京津線をきょうつせんと読んでいた京都人。

実は日本語べらべらのカタコト外国人。

実は天才。実は妖怪。実は神様。実は海賊。

この生徒たちもきつと、そんな『本性』を隠して、『ごく普通の高校生』という仮面を被っているだろう。

啓治も例に漏れず、本性を隠していた。

とある風使いの末裔。『波旬』という名の『神様候補』である啓治は、人の世で生きるために『高校生』という仮面を被って生きていこうと決めていた。

もしかしたら、啓治と同じような『波旬候補生』が、この学校にいるかもしれない。

いや、きつといるだろう。

だが、誰もその本性を明らかにほしくない。

人間の世界には、人間しかいないんだ。

(スカート、春一番に吹かれてめくれなかな)

と、じつくり三階の教室から女子高生を眺める。

「……なあ、啓治」

豊が小さく呟いた。

「んー？」

「今、スカートめくれなかなーとか思ったりしてないよな」

「い、いやあ？ べ、別にい？」

マズイ。と啓治は顔を赤く染めてくるりと開いた窓を背に振り返る。

波旬は、欲の神様。

啓治は、そんなモノにはなりたくない、こうして親元を離れ、人間界に暮らしている。欲望が啓治の中で大きくなればなるほど、『波旬』に近づいていくのだ。

啓治が忌み嫌う『神様』という名の『バケモノ』に。

「俺は、お前のことなら何でも分かるんだよ」

豊はバカにしたように言った。

心で隠しているつもりでも、ついつい仮面の下から本性が出ていたようだ。

(もっと上手く、隠さないとな)

そう確信したとき――

ガラッと教室の戸が開き、一人の『少女』が入ってきた。

「ここが教室か。なかなか綺麗なところではないか」

啓治と豊は開いた口がふさがらなかつた。

「君たちがクラスメイトか？ 初めまして」

かつかつかつかつ……

少女は歩を進め、啓治たちの所へ来ると、握手を求めた。

少女もまた、啓治の持論を裏付けるように、仮面を被っていた。

物理的な意味で、直接的な意味で、仮面を被っていた。

いや、ていうか兜かぶとを被っていた。

陽光に煌めく、漆黒かろくの兜を。

（すげえ）と啓治は息を呑んだ。

人は誰しも仮面を被っている。

人間の世界は、人間としてじゃないと生きていけない。

妖怪は妖怪であることを、神様は神様であることを隠して、人間世界に溶け込むのが当

然だと思っていた。



そんな考えを、一発で打ち砕く存在。

暗黒騎士は、暗黒騎士のまま、ありのままでそこにいた。

暗黒騎士のそんな生き方に——憧れたのだった。

## 第一章「脱いでいこう」

「鞍馬 啓治」は大きく振りかぶった。

膝を高く上げた左足をぐつと前に踏み出し、体重を乗せる。左手のグローブは腋に畳み、腰の回転、肩の回転を意識しながら、縫い目に添えた人差し指と中指に力を込めて——投げる。

フォーシームのストレート。真っ直ぐに伸びた球は——黒い煙を放ちながら分身して上下左右に揺れ動き、そしてキャッチャーの手の中へと吸い込まれていった。

「ストライーク！」

審判をしていた担任教師が、オーバークッションで宣告する。

そのあまりの変化球に、啓治はグローブを外して両腕を上げ、指先を掌に突き立てるようにしてTの形を作りながらこう言った。

「タイム！」

啓治のタイムを聞きつけ、キャッチャーがピッチャーズマウンドへと駆け寄ってくる。

「どうした、鞍馬くん。とても良い球だったぞ」  
 キャッチャーマスクを上げながら、彼女は心配そうに声を掛けた。  
 「うん。とてもいい球だと……思っただんですけど……その……投げた球種とは……違（ちが）うんですよね。……暗黒騎士さん……何かしました？」

啓治はジャージのファスナーを少し下ろしながら、しどろもどろに、目も合わさずに言う。

キャッチャーマスクの下にあるのは——漆黒の兜（かぶと）だった。プロテクターの下には漆黒の鎧（よろい）が。レガースの下には漆黒のすね当て。

そう、『彼女』こと『暗黒騎士』は全身を漆黒の甲冑（かっちゅう）に包んだ上で、さらにその上からキャッチャーの防具を着けていた。

兜はフルフェイスで顔は見えないが、その美しい声だけで、女性であるということは誰もが認識（にんしき）している。

「ああ、捕手（ほしゅ）とは投手（ていしゅ）をサポートする役割だと聞いてな。暗黒の力を駆使（くし）した」

「あー、暗黒の力だったのかー」

啓治は知ったかぶった。あまりにも当然のように暗黒騎士がそう言ったから。

「で、今ボールはどこにあるんすか？」

啓治は次の質問に移った。

漆黒の籠手（かごて）をしているせいで、彼女に合うグローブはなく、キャッチというよりボールはその黒光りする掌の中へ吸い込まれていったのだ。

「ここにあるぞ」

「ずずずず……黒い渦（うず）のようなモノが突然（とつぜん）現れ、そしてそこからボールがひよこつと出てきた。」

「……どこに……あったんですかね？」

さすがに、知ったかぶれるレベルを超えていた。啓治は困惑（こんわく）しながらも聞いてみる。

「暗黒空間だ。ダークデーモンドアを開いて、天地も時間もない場所に保管した」

「……便利だなー」

「さすがに、掌サイズの扉（かた）しか開けんから打者を消せと言われても困るぞ？ せいぜいあの棍棒（こんぼう）ぐらいだろう」

「バットもいけるんすか。超便利（ちようべんり）ですなー」

「うむ。ドコデモンドアは暗黒の力の中でも最も利便性が高い」

「え？ え？ え？ え？ 今『どこでもドア』って言いませんでした？」

「言っていないぞ。——ダコデモドア」

「ほぼ言ってるーっ！むしろ『どこでもドア』に引っ張られてしまってるじゃないっすか！ドラえもん好きなんですか？」

「知らん」

暗黒騎士はぶいっと横を向く。

「え！でも今さっき、どこでもドアって言った——」

「ドラえもんなど聞いたこともないわ。それがF作なのかA作なのかも知らん」

暗黒騎士は、知られたくなかった。

畏怖いふしゆうの象徴しやうちゆうである暗黒騎士が、まさかアニメオタクだと知られれば、人望がなくなると思っっているからだ。

「絶対知ってる……」

啓治は小さく咬かいて、それ以上は聞けなかった。暗黒騎士の気分を害するつもりはなかった。

「さ、無駄話むだなはこの辺にして、プレイボールを再開しようではないか」

「はあ……あの……暗黒騎士さんって……人間、なんですかね？」

「あつはははは！君は実に面白い男おとこだなっ！私が何に見えてるんだ？」

啓治は真剣しんけんに聞いていたが、暗黒騎士は腹を抱かかえて大きく笑った。

「まあ、その……形という意味では確かに人なんですけど……その……」

上手く言葉に出来ず、啓治は困惑こんぱんしていた。

「……そうだな。その質問にはこう答えよう。——スーパーマンは人間だと思ukaiい？」という言葉を残し、暗黒騎士はバッターボックスの方へと歩いて行ってしまった。

啓治は暗黒空間に一度は吸い込まれたボールの匂においを嗅かいでみるが、別段変わった匂いはいない。ただの、野球ボールだ。

とりあえず、野球を進めようと、振りかぶって——投げる。

ボールが分身みぶんし、急上きゆうじやう昇ありしては、急降下きゆうかうし、地面に付くかと思えば、ピタリと止まってストライクゾーンへとまた急加速する。

「ストライクっ！」

ノリノリな審判がぐっと親指を立てた。彼は教師で、ここで今野球をやっているのは生徒たち。

入学式を済ませたばかりの、ほぼ初対面に近い生徒たちだ。

初日の授業は絆きずなを深めるという理由から、野球が選ばれた。

親しくなるには、共同作業が一番良い。共通の敵を持つことも好ましい。スポーツは、絆を深めるのにとっても効果的であると担任教師は考えていた。

「タイム」

啓治がまた手を挙げると、暗黒騎士はすかさずキャッチャーマスクを上げて、漆黒の兜を露わにしながら、啓治の元へと駆けてくる。

「どうしたんだ鞍馬くん」

「やっぱり、スーパーマンは人間じゃないと思うんですよねえ……超人とか宇宙人とか……」

「やはりそうか。実は私もそう思っていたんだ。気が合うな」

「あと、キャッチャーマスクは上げるんですね」

「喋りにくいのでな」

「……はあ」啓治は言えなかった。「だったらその兜も脱げばいいのに」とは、口が裂けても言えなかった。

「認めよう。私は確かに超人的だろう。それは、私の世界でも同じだった」

「あ、やっぱり異世界の人だったんすか。ファクションが後衛的だなーとは思ってました」

「……やはり、異世界の人間だと……仲良くはして貰えないものかな？」

兜のせいで表情は見えなかったが、暗黒騎士は少し寂しそうな声をしていた。

「あ、いや。むしろ嬉しいです」

啓治は照れ臭そうにフオローする。だが、言えなかった。

自分もまた『超人』であるということ。

自分と同じく、明らかに他人とは違う姿、自分と同じく明らかに他人を圧倒する力を持ちながら、それを隠そうとしない暗黒騎士に、尊敬以上の思いがあったことを。

「おお、そうか！ 君は本当に良い奴だな！」

がっしりと手を握られ、啓治は少し顔を赤くした。冷たい籠手の感触が、何故か少し暖かく感じた。

そのあとも、暗黒の力を駆使してストライクを量産し、ゲームとしては何にも面白くない一回表が終わった。

一回裏。魔球ではないが、そこそこの剛速球を投げる好青年が、ワンナウト一塁で迎えたバッター、暗黒騎士。

この暗黒騎士に対しての初球は、暴投だった。

「大丈夫っすか！ 暗黒騎士さん！」

ネクストバッターズサークルでしゃがんでいた啓治が心配そうに声を掛ける。

「ああ、構わん構わん」

暗黒騎士はぱたぱたと手を振って心配ないと返す。

さらに二投目もワイルドピッチ。  
その二球とも、漆黒の兜を狙い撃ちしていた。

「あつはつは。構わん構わん」

そして三球目——真っ直ぐ伸びた球は、同じ軌道を描き——

「はつはつは。は——つはつはつは！……はつつつ！」

大笑いした暗黒騎士は、バットを投げ捨ててバッターボックスから跳んだ。

たった一步。だがそれは、地面すれすれをマウンドまで一っ飛びする一歩だった。

ダークデーモンドアが開き、ずらあ……つと赤い刀身の剣が現れる。

「ひいっ」ピッチャーは、恐怖にうずくまった。

彼は、暗黒騎士に喧嘩を売りたかった訳ではない。ただ、緊張のあまり投球が乱れたにすぎない。

だが、暗黒騎士は勘違いしていた。世界を征服し、用済みとなった暗黒騎士を殺すため、異世界の帝国から派遣されてきた刺客であると。

黒い煙をもわもわと発しながら、剣が振り下ろされる。

が——その凶刃は、青年には届かなかった。

音が鳴った。パシンと小気味のいい音だ。そう——暗黒騎士は攻撃を受けた。

まさかの思わぬ反撃。

驚いた。とても、とても。

漆黒の兜——その頬を打たれたのだ。

ダメージは、ない。だが、精神的には、効いた。

「暗黒騎士さん、ダメです。正気に戻って下さい」

啓治だ。全身が、熱した鉄のように真っ赤に染まっている啓治が、間に入っていた。

ジャージはポロポロになり、まるでどこぞのストリートファイターのように袖が取れてしまっている。

「鞍馬くん……」

すまない。取り乱してしまった。悪かった。そんな言葉が言えなかった。

「暗黒騎士さん、剣はダメです。この世界に生きるなら、あなたの世界の常識は——捨てるべきなんです」

暗黒騎士は何も言わず剣を納めた。くるりと背中を向けて、バッターボックスへと歩いて行く。

甲冑の下で少女の胸は高鳴っていた。

（鞍馬くん……私よりも速く、そして正確だった。何よりもあの目……なんだこの、ゾク

ゾクとした感覚は——)

啓治の真剣な眼差しが忘れられない。風のような動き、瞬時の判断、行動力。彼のような人間が、暗黒騎士のいた世界にいて欲しかった。

——という感情では語り尽くせない、胸を焦がす何か。もう、刺客がどうか、吹っ飛んでいた。

その後の授業は、全然頭に入らなかつた。

(ああ……なんなんだこれは……この胸が焼けるような思いは……)

黒板よりも、啓治に目が行く。あくびをしている顔なのに、輝いて見える。

(こつちを向けえ……こつちを向けえ……こつちをおろ、向けえいい)

暗黒の念を送ってみる。

するとどうだろう。啓治がちらりとこつちを向いた。

ずきゅ——ん。

ただ目が合っただけ。ただそれだけで暗黒騎士は机に突っ伏した。

まるで、鳥が鉄砲玉でも食らったように。

そのまま椅子から崩れ落ち、教室の床をゴロゴロ転がる。

(目が合っちゃった！ 目が合っちゃったーっ！)

ごろごろごろ……ごろごろごろ……

漆黒の鎧の上から学校の制服を着てはいたが、まるで石でも転がっているような音が教室内に響く。

(落ち着け。落ち着くんんだ私。先ほどまで角を突き合わせて話をしていたではないか)

何度も深呼吸を繰り返して、心を落ち着けて席に戻る。

(私は一体、どうしてしまったというのだ)

昼休みにも暗黒騎士は悩み続けていた。

その光景は、周りの人間から見ても異様だった。

「暗黒騎士さん、弁当を広げたまま食べようとしなくて、食欲ないのかな」

啓治はクラスメイトの「辻本 豊」と食事をしながら、暗黒騎士を心配していた。

授業中に床を転がったり、ぞわぞわとした念を送られたり。それは、全て自分の責任だと思っていた。

「いや、兜のせいで食べられないだけじゃないか」

クラスメイトの意見は、啓治の耳には入ってこなかった。

「やっぱり、明日お詫びの品を渡そうと思う」

「……何の？」

「彼女のブライドを傷つけてしまったことさ」

啓治は暗黒騎士を切ない目で見ながら、昼食をゆっくりと進めていた。

「暗黒騎士さんも大概だが、お前も変な奴だな」

豊は、別の話題に持つていこうと決めた。

くだんの暗黒騎士は、啓治と目が合ってしまった、また高まる胸を押さえようと、くるりと身体からだの向きを変え、ぎゅつと籠手こてに包まれた拳こぶしを握る。

「な、何か用……？」

急に身体からだの向きを変えてきたので、隣に座っていた女生徒が引きつった笑みえを浮かべていた。長い黒髪くろかみの、一見すると大人しそうな少女だ。

「あ、いや……うむ。助言を賜りたい」

用があつて横を向いた訳ではなかったが、暗黒騎士はこの際、今の自分の気持ちを聞いて貰おうと思つた。

「助言……相談なら、乗るけど」

「君の名前は確か——」

「マホだよ……小悪魔が歩くと書いて魔歩まほ。よろしく」

「……何やら私と近いモノを感じる。小ささは名前に関係ないようにも思えるが——よろしく」

「あーうん。私も暗黒騎士さんとは気が合うかなーなんて思つた。で、どうしたの？」

「実はな。ある男のことを考えると、胸が苦しいのだ。病気か何かだと思ふか？」

「……んー。咳せきとか吐はき気は？」

「ない」

「不快感だけ？」

「それが、不快ではないのが逆に怖いのだよ」

「ふむふむ。その、ある男のことを考えると——つてのは、例えばどういうことを考えるの？」

「彼のことなら何でも知りたいと思うし、彼をどうこうする未来を妄想もうそうしたりする。匂においを嗅かいでみたいという衝動しょうどうも湧わいてくるな」

「ふむふむ。OK分かつた」

「おお、分かつたのか！ 教えてくれ！ この思いはなんなのだ！ この身体からだの異変いへんの原因げんはなんなのだ！」

「殺意」——だよ。きつと、親か友を前世で惨殺されてるんだよ！」

一見すると大人しそうな少女、マホは魔女のような笑みで拳を握り、強く言った。

「……そうだったのか。今まで抱いたことのない殺意だ。さらに教えて欲しいことがあるのだが」

「はいはい。何でも教えてあげましょう。——面白そうだし」

「彼と常に共にいるには、彼をより知るには、どうすれば良いのだ？」

「家宅侵入だよ！ それはもうストーリーキングしかないよ！」

一見したときは大人しそうだった少女、マホは魔女のような笑みで拳を握り、強く言った。

「家宅侵入は確かに良い案だ。——が、しかし、私がスパイをしたら、彼は私を嫌うのではないだろうか？ 私は嫌われたくはない」

「バレなきゃいいじゃん。この国では、立件されなきゃ犯罪にはならないのよ！」

改めて一見してみると魔女のような少女、マホは拳を握り、強く言った。

「しかし、私は顔を見られて………ないな」

「その人とも鎧姿でしか会ってないってこと？ だったら簡単だね。暗黒騎士さん」

「と、言うと？」

「脱げばいいのだよ！」

マホは見た目の印象通り、魔女のような笑みで拳を握り、強く言った。

「これを脱ぐのはちよつと——」

「そう言えば、どうしてそんな兜被ってるの？」

「うむ。——これは国家機密だぞ？」

「うん。誰にも言わない」

「私は………童顔なのだ」

小さく、控えめな声だった。

「は？ じゃあもしかしてその鎧も？」

思わぬ理由に、マホは啞然とした。

「ああ、体型を誤魔化すためだよ。帝国の畏怖の象徴たる暗黒騎士の私が童顔だなどと、バレてしまえば誰も暗黒騎士を怖がらなくなる」

「童顔を隠すためにだけに、それ被ってるんだ」

「うむ」

「じゃあやっぱり、脱げばいいと思うなー」  
 マホはこう思った。せめて自分だけでも素顔を見たい——と。

その日、鞍馬啓治が家に帰り、黒いTシャツに手ぬぐいを頭に巻くというラーメン屋のような格好で料理をしていたら——ピンポンと呼び出しチャイムが鳴った。

誰かが来る予定なんかなかったはずだと不審がりながらも、玄関へ向かうとそこには——金髪に翡翠色の目をした美少女がいた。

中学生ぐらいだろうか。啓治よりも背が低く、日本人とは思えない端正な顔つきの、可愛らしい童顔の少女。服装は、制服。

啓治と同じ学校の、制服だった。

「神でえす！ 中に入っていていいですかっ？」

少女は笑顔で両手を広げる。ぱあっと後光が差している気がした。

「ダメです」

ボタン。啓治は扉を閉めた。

ピンポン——と呼び出しチャイムが鳴り、啓治は扉を開ける。

「社長です！ ここで働かせて下さい！」

「社長ならもう働いてるんじゃないですかね」

ボタン。ピンポン。

「家政婦です！ ここではたらせて下さい！」

「早口過ぎて言えてないじゃないですか」

ボタン。ピンポン。

「家出娘です！ ここではららつてくつさい！」

ボタン。ピンポン。

「じゃあなんだつたらいいんですか」

「友達だつたら入れてもいいけど」

ボタン。ピンポン。

「くーらーまーくーん。あーそーぼー」

「最初からそう言えばいいじゃないか。……で、君は誰？ 制服着てるからウチの学校の

子だろうけど」

「同じクラスの者です」

「はて、君みたいな子いたかなー。なんで女の子がウチに？」

啓治は改めて、じつくりと少女を観察した。

ブロンドの髪に翡翠色の瞳から、外国から来たか、少なくとも日本人同士の親ではないだろう。年は中学生程度か、あるいはもっと下か。

背は低い。と言っても、一五〇センチメートルは越えているだろう。胸は大きく、出るところはしっかりと出ている。

小柄な体型のせいかな、より大きく思えた。

童顔で巨乳。

それが、第一印象だった。

「ほら、絆を深めるための野球大会で鞍馬くんが格好良かったから……」

少女は恥ずかしげに俯く。

「あ、あの野球に参加してんだ。じゃあやつぱり同じクラスかな。まあ、どうぞ」

啓治はいれるべきか悩んだが、高校に入学したばかりで友達欲しかったため、とりあえず疑念を持ちながらも中へ促した。

こうして、少女は鞍馬啓治の家へとなんとか侵入することが出来た。

少女は思った。

(ああ、ついにここまで来てしまった。間一髪であつたが、マホの助言は間違っていないなかつたようだ)

そう、彼女は暗黒騎士の『中の人』。啓治が素顔を知らないことを逆手に取り、啓治に近づぐために鎧を脱ぎ去ってやってきたのだ。

「君、名前は？」

名前を聞かれ、少女はたじろいだ。暗黒騎士。本名『エールリンク・ラグナ・ウォルター』は、その名前を言ってしまうはバレてしまう可能性を考慮していた。

「えー……エリーって呼んで下さい」

「……………エリーちゃん？」

大丈夫かな。大丈夫かな。エリーの中で、どくんどくと鼓動が早鐘を打つ。

啓治は少し考えたあと、エリーという名前の違和感を払拭した。

エリーという名前がある以上、それを少し伸ばす程度なんて、火星と書いてジュピターなんてレベルのキラキラネームまで横行したこの時代では、違和感ですらないと判断した。

「そっか。よろしくエリー。上がって奥の部屋までどうぞ」

(七——っつつっ！)

エリーは心の中で、野球のときに担任教師がやっていたオーバーアクションを思い出し

ていた。

啓治の家は、2DKのアパートだった。

右手にバスルーム。左手にキッチンを眺めながら、少しだけある廊下を歩き、扉を開けてさらに奥の部屋へ。部屋に入ると、ニュース番組が低音量で垂れ流しになっているテレビ。ガラスのテーブル。万年床の布団が敷いてある。

エリーは深呼吸する。

(これが……鞍馬くんの部屋の匂い……なんと芳しい……)

申し訳程度に、ちよこんと布団の隅に座る。スパイとしてここにやってきた後ろめたさがあつた。

「お茶は、烏龍茶でいい？」

「うむ……あ、はい」

(危ない！ せっかく教わった近代日本語を使い損ねそうであった！)

自分が暗黒騎士であることを悟られないよう、注意しながらエリーは笑顔で誤魔化した。

啓治が扉の向こう、キッチンへ向かったのを見届けてから――

ばふつと枕へダイブ。

顔を埋めて足をバタバタさせ、啓治の世界を堪能する。

ごろごろ……ごろごろ……すつ。

ひとしきり布団の感触と枕の感触を楽しんだエリーは、元の位置で体育座りをした。

と同時に――啓治が腋にペットボトルを挟んでコップを二つ持ったまま戻ってくる。

間一髪だった。〇・一秒遅ければ、啓治の布団の感触を確かめたことがバレていた。

「で、目的はなんなの？」

啓治はカーベットのの上に、どつかりとあぐらをかき、烏龍茶をコップに注ぎながら問いかけた。

「あーうん。ホント、ただお邪魔しようと思っただけです」

エリーは笑顔で答えた。不信任を抱かせないためには、笑うしか無い。

「ふーん」

……沈黙の時間が流れる。

何を話せばいいのか。何を聞けばいいのか、エリーは失念していた。

「あの……彼女とかいらっしやるんでしょうか？」

不躰な質問。これを聞くのは怖くて仕方が無かったが、そのために来たのだ。

「え？ いや……いたこともないけど」

「そうなんだ」

ほそりと眩くらいたが、エリーは心の中でガッツポーズを取っていた。

ゴールを決めたサッカー選手ぐらい、駆けだして膝ひざで滑りながらのガッツポーズだ。

「じゃあ、好きな女性とかはおられるんでしょうか？」

「ん——。んんん——。あ、気になる子はいるよ？」

啓治は目を閉じて腕うでを組み、首を横にぐーっと傾かたむけながら眉間みげんにシワを寄せて考えた結果、ある人物に辿たどり着く。

「だ、だだだだだ誰ですかっ！」

エリーの脳裏のうりにクラスメイトの顔がぶわつと広がる。

「ちようどいいや。ちよつとその件で意見を聞きたいんだけど」

「はい！ どのようなことでも一瞬いつしゆんで叶かなえますす！」

「ランプの魔神まじんみたいなの言いくさだな。うん、ちよつとね、女性に料理を振ふる舞まおうと思おもうんだけど」

「その、気になる子に？」

「うん。で、味を見て貰もらおうかなって思うんだ」

啓治はそう言いながら立ち上がり、また部屋を後にする。

エリーは啓治に見られないような位置で頬ほおをぶうつと膨ふくらませた。

（この恋こい、未然に防まもがねばっ！）

エリーは燃もえていた。

気になっっているレベルなら、まだチャンスはあるはずだ。

そして——出てきた料理にエリーは目を丸くさせた。

白い丸皿に、鴨かもロース。それはエリーが異世界の帝国ていこくにいた頃ころに食べた、宮廷料理きやうていりのようだった。

（なんと美しい料理りょうりだろう……）

エリーの世界に、鴨かもはいない。

だが、ローストビーフのような、中をピンク色の状態じょうたいでじっくり火を通した肉料理は、エリーの世界では最高級の料理だった。

それを、こんな狭い一室の、ただの少年が出してくることに、驚おどろいた。

「エリー。ヨダレ出てるよ」

「はっ！ す、すみません！ 卑いやしいですよね！ 野良犬のらいぬの如ごとき浅陋せんろうさですよね！」

「いやあ、嬉うれしいよ」

（ああ、まばゆいっ！ なんとまばゆい笑顔なのだ！ こんな下劣げれつな私わたしにっ！）

エリーは思わず手を広げて、下からではなく左右から差し込むように顔を覆おほった。

「何その昔のアイドルみたいなポーズ。まあ、とにかく食べてみてよ」  
（食べる……）

目の前に用意された食器。

それは、ナイフでもフォークでもなく……箸だった。

エリーは箸を取り、右手と左手に一本ずつ持つと、ナイフとフォークの要領で鴨肉を切ろうとした。

「……箸の持ち方と使い方、間違ってるよ」

啓治の言葉に、エリーはびくつと身体を震わせる。

「え！ ……こ、こうですかね」

エリーは焦っていた。この世界の道具を上手く使えないと、素性がバレてしまうのではないかと心配だった。

だが、その心配は無用だった。髪や瞳の色から、エリーはすでにアジア人では無いと啓治は思っているが、異世界人とまでは、思っていない。

「ナイフとフォーク、出そうか？」

「いえ！ これで食べますっ！ 食べてみせますとも！」

次にエリーは箸をぎゅつと握りしめる。そして——ぐっさーつと勢いよく鴨に突き立て



た。

「うん、なるほど。それも違うなー」

「じゃ、じゃあ、教えてくれませんか？」

恐る恐る、上目遣いで提案する。面倒臭い女だと思われるんじゃないかと怖い。

「いいよ。俺の持ち方が正しいかも分かんないけど……」

「正しさなんてくそ食らえです！ 鞍馬くんの持ち方がいいです！ いいんですっ！」

「なんでちょっと川平風に……じゃあえつとね……人差し指がこうで、中指がこう……ペンを持つ感じに似てるんだけど……」

エリーはドキドキしていた。

啓治に手取り足取り……実際には手しか取ってないが、細かく教えてくれるという意味で手取り足取り教えてくれる。

顔が近くにある。

それがもう嬉しくて嬉しくて。嬉しくて嬉しくて嬉しくて。

啓治に箸の持ち方を教えて貰ったエリーは、その持ち方のまま——  
ざすっ！ と鴨を刺した。

「君はあれかな？ 蜂の生まれ変わりかな？」

「美味しいですっ！ うわー。なんだこれー」

ソースをたっぷりとつけた鴨ロース。初めての体験だったエリーは、感動すら覚えていた。

「ほんと？ ありがとう」

啓治は、少し照れ臭そうに笑顔を見せた。

エリーはぱあつと花が咲いたように笑顔を見せた。

ありがとう。その言葉一つで、天にも昇る気持ちだった。

（ああ、この思い。なんと心地がよいのだろうか。マホは殺意と言っていたが、そんなモノでは言い表せぬ。……きつと、私の伝え方が稚拙なために、マホは殺意であると間違えたのであろう。……では、この感情はなんなのだ？ この、熱く燃えたぎるような、それでいて甘い感情は……ああ、鞍馬くん……ああ……）

熱くなった頬を冷え性な手で押さえ、くねくねと身体をくねらせる。

「何してんの？」

「あ、な、なんでもないです！ いやあそれにしても美味しいですねえ。このソースが絶妙です」

「そう？ オリジナルで作ってみたんだけどさ」

「この、にんにくの香りが——」

「あ、にんにくは使っていない」

「しませんよね！ うん！ にんにくの香りはほしくないです！」

エリーは慌てふためきながらも、『私もそう思っていました』とでも言わんばかりに知ったかぶった。

「他には？」

「しょうがが……の？ 香り……があ？」

ちらつちらつ。啓治の顔色を窺いながら、途切れ途切れに聞く。

「しょうがは入ってるよ」

「しますよね！ しょうがの香りは当然しますよね！」

「そうだね。しょうがは使い勝手がいい。エリーはよく料理とかするの？」

「え！ ま、まあ、当然……女の子ですからね！」

エリーはえっへんと腕を組んで……嘘を吐いた。

「そのソース、ちよつと拘りがあるんだけど……分かるかな？」

「……あれですよ？ 醤油ベースですよ」

「そうそう。醤油がベースで？」

「でっ？ と……そうですねー。ワインの甘みがあ……してえ？」

エリーは自信なげに、ちらつちらつと啓治の表情を読みながら言う。

「ワインは入れてない。甘めの醤油を使ってるんだ」

「ませんよね。うん、ワインの甘みはしてませんよね……と。あ、ゆずの香りがあ……してえ？」

「うん。ゆずは入ってる」

「るよね！ してるよね！ うんうん。あとは……酢？」

「ただの酢じゃないかな」

「………ポン酢………じゃないですよ」

啓治が少し顔をしかめたのを見るや——即座に否定する。

「米酢？」

「でも「でもないですよね！」」

危うく『でもない』って言われるところだった。

「………バルサミコ酢」

「お！ 正解「ですよねっ！」」

知っている酢を並べただけだったが、まさかの正解にエリーは目を輝かせた。

「あ……」

「どうしました？」

「にんにく入ってたかも」

「ですよね！ 私が言ってた奴入ってますよね！ 私が最初に言った奴」

「あ、違うわ。結局しようがに替えたんだった」

「ですよね！ にんにく入れようと思ったけどしようがに替えたんですよ！ 分かるな。味に出てますそれ。そっか葛藤が味に出たから最初に言っちゃったんだ。うん」

「でも拘りはそこじゃなくて、コクと深みを出すために入れてるのがあるんだけど、やっぱり分からないかな」

「あー、はいはい。コクと深みはすごい入ってますねー。これはあれかなー」

「そう、あれなんだよ」

「コエンザイムきゅーてん」

「ごめん、それなんだっけ？ そういうんじゃないよ」

「じゃないですよね！ そういうのじゃないですよね！ じゃあ、えっと……マイナスイオン？」

「……………」

「じゃなくて……インテル？」

「……………」

「でもなくて……夢？」

「……………」

高い賞金が懸かっているクイズ番組のような、長い沈黙が襲う。

「……………」あの、ちょっとだけいいですか？」

「え？」

「ほんのちよつとだけ、こつち見ないで下さい」

「うん、別にいいけど」

啓治がくるりと背中を向けると――

エリーは布団にダイブして、ゴロゴロと転がった。

（全然分からんっ！ 分からーん！）

ごろごろごろ……ごろごろごろ……すつ。

啓治の匂いを堪能したエリーは、きりつとした表情で言う。

「ヒント下さい」

「あ、もういいの？」と啓治は振り向いて、「鳴の部位を使ってるんだ」と答えた。

「……………カモの」  
 エリーは鴨を知らない。だが、部位ということで牛や豚のような生き物であるだろうと予想する。

さらに、今食べていた肉がその『鴨』であると仮定した。

「カモの……前足？」

「ま、前足っ？ 後ろ足があんの！」

「あ、じゃなくてえ……鼻の部分……」

啓治の表情を見ながら、答えを探る。

「でもなくてえ……心臓とか？」

啓治が「おっ」という顔を見せたので、たたみかける。

「内臓だ！ 内臓ですっねっ！」

「正解。鴨の肝を入れて、肝醬油をベースにしてるんだよ」

「あ、あの」

「ん？」

「正解したらご褒美とかないんでしょうか？」

「ご褒美って……すでに食ってるし……いいいいこでもする？」

啓治は冗談で言ったつもりだったが——

「それお願いしますっ！ お任せでお願いしますっ！」

とエリーが強ク言うので、その綺麗なブロードの髪に手をやり、優しく撫でた。

（これが……いいいいこか……この、黒き災いと呼ばれた私が、まるで赤子のように扱われている……だが、とても心地よい。ずっとこうしていたい）

エリーはまるで寝てる猫のように目を瞑って大人しく撫でられ続ける。

啓治は、まるで妹が娘が出来たような気持ちだった。

「で、エリーの目的はなんだったの？」

「え？」

「ただ、遊びに来ただけじゃなくて、何か本当の理由があるんだろ？」

「いえいえ！ ホントやましいことなんて何もありませんっ！ ただ鞍馬くんとお近づきになりたくて！ ホントそれだけなんです！ ホント！」

「まあ、そう言うか」

真の目的があつたとしても、それをここで言うこともないか、と啓治は問い詰めるのを諦めた。

「そうだ！ 鞍馬くん、何かやりたいこととかありますかっ？」

「したいことねえ……」

エリーは、はつとある言葉を思い出した。

男はオオカミなんだと。食われちゃうぞと。

「……お食べになられ遊ばれるんですね？」

「え？ 何？ え？ どっち？ 食べるのか遊ぶのか」

「私を食べないんでしょうか？」

「エリーの目には、俺が巨人やゾンビにでも見えてるの？」

「いえいえ！ どう見てもただの風使いにしか見えません！」

「……………何を知ってる？ 親父の差し金か？」

急に、啓治の目が鋭くなった。

その目は、あのときと同じ。背筋がゾクゾクする、殺し屋のような目だ。

威嚇いかくするような目であったが、エリーはその視線を向けられるだけで興奮していた。

（ああ……この目で見られるなら、恨まれてもいいかもしれない）としながらも、エリーは慌わづてて説明する。

「あ……えっと……ほら、野球のときにわた……暗黒騎士あんくろきしにカウンター食らわしたじゃないですか。あのとき、風の力を使ってたなってだけです」

「風の力つてバレないように、やったつもりだったんだけどな」

「どうしてですか？ 格好良かったです！ とつても！」

「君の言うとおり、俺の一族って、代々風を操る力があるんだけど、その力を使うと、全身真っ赤っかになるんだよ。服もポロポロになるし……………ダサくてさ」

「そうですね。強すぎる力は、見せるべきでは……ないですよ」

エリーは乾いた笑いを浮かべた。自分は隠すこと無く暗黒の力を駆使くわくししてるからだ。啓治とは真逆。合わない性格ということになるのではないだろうか。

啓治に嫌きらわれたくない。

その感情だけが、エリーの中で渦巻うずまいていた。

（はっ！ ちょっと待て！ この料理を振る舞まわれたら、鞍馬くんの気になる子はロメロメになってしまうんではなからうか！）

エリーは戦慄せんりつした。

今、自分がメロメロになっているだけに、これを『気になる子』に食べさせる訳にはいかない。

「あの、この料理ですけど……」

「ん？」

「辛さが足りないと思いますっ！」

エリーの目に、めらめらと嫉妬の炎が燃えていた。

「え！ 辛さ？ なんで？」

「えっとその……ブームなんで！」

「あー。女子高生の間で流行ってるとか？」

「そうですそうです！ そうなんです！」

「んー、辛さかー」

エリーはさりげなく、後ろ手でダークデーモンドアを開き、あるガラスの瓶を取り出した。

「これ！ どうでしょう！」

それは、おどろおどろしい紫色の液体が入った、謎の小瓶だった。

「エリーはいつもそんなの持ち歩いてるの？」

「今、ブームなんで！」

「なるほどねー。どんな料理にも掛けられるように持ち歩いてるんだ」

「香水でも入ってそうな瓶を受け取り、フタを開けてみる。」

無味無臭のソース。

一滴、指の上に垂らして、ぺろりとなめてみると――

「これ……西洋わさびの味がするね。鴨と相性がいいかも」

「わびさびって奴ですね！」

「うん、違うけど、うん。いいね、これ」

啓治は平静を保っていた。が、心の中では――

（辛――――― いっ！ あああああああああああつ！ 辛いっ！ 親の敵かってくらいに辛いっ！ これが女子高生の辛さかっ！）

舌がのたうち回っていた。口の中がロデオ状態だったが、それを表情には見せなかった。初対面の可愛い女の子の前で、狼狽える姿は見せたくない。

啓治は、遊園地に来てるのに頑なにジェットコースターに乗ろうとしない奴の気持ち少しだけ分かった。

「きょうびの女子高生は、五滴ぐらい使うと思いますねー」

「へえ、そうなんだー。へー」

啓治はぐびぐびと烏龍茶を飲み、口に含んで痺れた舌を休ませる。

（ふっふっふ。普段「ジュワッ！」しか言わないウルトラマンでも、これを口にすれば「辛っ！」と言ってしまうであろうデンジャーソースだ。――とくと味わうがいい、鞍馬くん

の思い人よ)

エリーは啓治にわからないよう、にやりとほくそ笑んだ。

次の日の昼休み、鞍馬啓治は緊張していた。

手には、綺麗に包んだ弁当箱。持ち手のところが花が咲いたように見える、花包みだ。それを手にしたまま、ちらちらと暗黒騎士に視線を送る。

何も聞かず、勝手に作ってきてしまったが、食べてくれるだろうか。

「何を躊躇してんだ？ 渡すならさっさと渡しに行け」

目の前で昼食を取っているクラスメイト『辻本 豊』は全てを知った上で、呆れた風に言った。

「でもなー」

「じゃあもう俺が渡しに行つてやる」

立ち上がる豊の袖を引つ張り、啓治がゆつくりと立ち上がる。

「わかったよ。行けばいいんだろ」

「そうそう。なんだかんだで結局行くんだから、さっさと行つてこい」

行動も感情も、全て読まれている。豊には敵わないな。と頭をポリポリかきながら、暗黒騎士の元へと向かう。

「何用かな？」

暗黒騎士は顔を向けることなく、小さく言う。

鎧の下で、どつくんどつくんと心臓が早鐘を打っていた。

「暗黒騎士さんって、お弁当持ってきてないんですか？ 昨日も今日も、食べてないみたいですが」

「……持ってきてない」

啓治は胸に手をやり、「よかった」と笑顔でほっと息を吐く。

「良かったら、これどうぞ！ 野球のとき、殴ってしまったんで、お詫びの意味もありまして」

「うむ」

差し出された弁当を受け取る。

「何何？ なんか貰ったの？ もしかして、あれが暗黒騎士さんが殺したい人？」  
にやりとほくそ笑むマホの声は、聞こえなかった。

(私はなんて鉄面皮な女なのだ！ ありがとも言えぬのかっ！)

だん。と机を強く叩く。もつともつと話したいのに、緊張からか話せない。そんな自分が情けなかった。

無言のまま、弁当箱を開けると——そこには色とりどりのおかずと、ご飯。

メインのおかずには、見覚えがあった。

「これ、ソースなんで、是非掛けてお召し上がり下さい」

「ん」

赤いキャップの魚の形をしたソース入れ。

「ただの醤油じゃないの？」

マホはケラケラと笑いながら言う。

だが、マホは嬉しかった。

暗黒騎士の世界では昼食を取らないと聞かされていたが、このシチュエーションならば食うに違いない。

そして、食うならば、兜を外すしかないはずだ。

(鞍馬くん、ファインプレーだよお?)

「あ、暗黒騎士さん、もしかして箸使えないですか？」

エリーが箸を使えていなかったのを思い出し、ナイフとフォークを用意していなかった

ことを悔いた。

「いや、問題ない」

ソースを満遍なく鴨に掛け、箸をペンを持つように持つと、とんとんと先を整える。

箸の使い方は、啓治に習っている。そこは問題なかったのだが、兜を外そうとして、気付く。

(もし、兜を取ってしまったら、私がエリーだつてことがバレる……私が突然家に押しかけたデリカシーのない、浅ましい女ということが……バレル)

暗黒騎士は焦っていた。

啓治に嫌われるんじゃないかと、不安で堪らなかった。

その結果——暗黒騎士は箸を置く。

「あれ？ 食べないの？」

訝しげにマホが聞く。

暗黒騎士が手をかざすと——ずず……ずずず……ずずず……ずずず……と、黒い渦が料理を飲み込んでいった。

それは、ダークデーモンドアだ。

暗黒騎士はダークデーモンドアを開き、いったん料理を暗黒の世界に閉じ込めたあと、

それを口の中に出すことで、兜を外すことなく料理を食べることに成功した。

「え？ 今食べたの？」

マホは思わず二度見した。

「味は、どうすか？」

「ん。良い味付けだ。これは甘めの醤油をベースにしようがやゆずの香り。あとはバルサミコ酢も少々入ってるな——それにこの深みとコク。……そうか、肝だな？ 鴨の肝を溶かし、肝醬油のようにしている。……それと……デンジャーソースが……入ってる」「すげええええええつ！ さすが暗黒騎士さん！ っていうかあれデンジャーソースって言うんだ！」

啓治は感心した。

たった一口。たったの一口で全てを言い当てられてしまった。

実際は、暗黒騎士はエリーとして先に答えを教えて貰っていたのだが、エリーと暗黒騎士が同一人物であるなどと、啓治は考えもしなかった。

そんな憧憬の念を暗黒騎士はひしひしと感じていたが、喜んでいる余裕は無かった。

(辛—— いっ！ 辛い辛い辛い！ 三つ目の辛いは『つらい』方だ！ 辛くて辛い。辛みが辛い！ 辛味づらい！ ——だが、狼狽える訳にはいかないっ！)

兜の下で、暗黒騎士は泣いていた。辛さのせいで、汗や涙が止まらない。

全てを拭きたいが、拭うには兜を外さなければならず、耐えることしか出来なかった。

「暗黒騎士さんって、食器いらなんだねー」

マホは残念そうな顔で溜息を吐いた。

せつかく、兜の下が見られると思ったのに。

そう簡単に脱ぐ訳がないか、と納得した。

啓治の家へ行くために、鎧を脱いだことも知らずに。

「私も少し貰おつかなー」

と、マホが箸を伸ばすが、暗黒騎士はがしつと腕を掴んで止めた。

マホに食べられたら、『女子高生の激辛ブーム』という嘘がバレてしまう。

急いで処理しようと、次から次へとおかすが黒い渦に飲み込まれていく。

「あー、独り占めしちゃうんだー」

残念そうなマホは、仕方なく自分の弁当を食べることにした。

一口でもその辛さに打ちのめされていたが、啓治が作ってくれたモノを残す訳にもいかない。暗黒空間に残しておくより、身体の一部にしたかった。

たった一滴でも地獄のような辛さのデンジャーソース。

それが、五滴も使われているソースをたつぷり付けた鴨ロース。それでも、完食しなかった。

たとえ、この身が引き裂かれようとも。

「実に美味であった」

振り絞って出した、精一杯の言葉だった。

「あ、ありがとうございます！」

啓治は嬉しかった。全てを理解してくれたことが。一分と掛からず、全て食べきってくれたことが。エリーの言っていたことが、正しかったことが。

啓治は思わず、敬礼していた。

そして、一礼し、席へ戻る。

ここで暗黒騎士は思う。

(待てよ。この料理を私に振る舞ったということは……鞍馬くんが気になってる女性って

……私？ 私なのか?)

暗黒騎士は頬に手を当て、身体をくねくねとくねらせた。

思い人が、相思相愛なのではないかという予測だけで、天にも昇る気持ちだった。

「はいお疲れー」

席に戻った啓治に、豊が声を掛ける。

「……うん」

「おいおい、なんだその中途半端な顔は」

「中途半端な顔してるかな？」

「中途半端な顔してるねー。嬉しいけどどこか恥ずかしいみたいだな」

「豊は相変わらず、俺のことを何でもわかるんだな」

「俺は相変わらず、お前のことなら何でもわかるんだ」

「じゃあ、どうすれば良いと思う？」

「選択肢は二つだ。受け入れるか、飯抜きか」

「飯抜き？」

「お前は今こう思ってる。食べて貰えて嬉しい。でも待てよ。クラス全員に、暗黒騎士さんに気があることがバレちゃったんじゃないかねえか？ これはマズイぞ。高校生活が始まって早々、もういじられまくってしまう」

「その通り。よくわかるな」

「その通りによくわかるんだなこれが。そこで、だ。ほら、あの子」

豊が指をさしたところにいるのは——暗黒騎士。

「暗黒騎士さんのさらに向こう、戸の前だ」

教室の後ろの戸の前。そこに、ヘッドフォンを付けて本を読んでいる少女がいた。

高校生にしては、幼い顔の少女。子供料金でバスに乗れそうな子だった。

「お前にはどうせ暗黒騎士さんしか見えてないだろうがな。あの子もどうやら、弁当を持つてきていないらしい」

「へえ」

「そこでだ。お前が食べる分の弁当を彼女にあげることで、お前は暗黒騎士さんにメロメロな恋愛野郎から、困ってる人を放っておけないうさんくさい野郎にランクアップ出来る訳だ」

「ランク上がってるのかそれ。——でも、貰ってくれるかな?」

「貰ってくれるかどうかは問題じゃ無い。一人の女を虜にするんじゃないくて、誰でもみんな分け隔て無く手を差し伸べるんだよというアピールさえ出来ればいいんだよ」

「なるほど」

「ほら、さっさとクラスの人気者になってこい」

啓治は自分が食べる分の弁当を持って、もう一度少女の方へ向かう。

(むっ! また来たっ!)

暗黒騎士は嬉しかった。何度でも、何時でも啓治と一緒にいたかった。

が、しかし——啓治は暗黒騎士をスルーしたのだ。

これには暗黒騎士も驚愕したが、目で追う訳にはいかない。

啓治がそうだったように、暗黒騎士もまた、啓治に気があるとバレてはいけなないと考えていた。

だから、腕を組んだまま、見ないようにしていた。

しかし、気になる。何よりも、気になる。

意識を集中させて、啓治の声を拾う。

マホが何か話をしていたが、全く耳には入らなかった。

「これ、良かったらどうぞ」

啓治は自分が食べるはずだった弁当を、見知らぬ少女の机に置いた。

その言葉で、暗黒騎士はずーんと落ち込んだ。

(貴奴か。鞍馬くんの思い人は! やはり、私への弁当は、昨日の詫びに過ぎない。ついでだったということかつ! 私はずいぶん前座。奴が本命なのは明白——)

机に突っ伏した暗黒騎士。

その後ろで、ヘッドフォンを付けた少女は顔を上げ、啓治をじっと見つめた。

猫のような大きな目。小さな唇。

「……………」

少女は一言も発さないまま、小さく頷いて、弁当箱を受け取った。

じつ……と啓治を見つめながら。

暗黒騎士は兜の下でほくそ笑む。

（鞍馬くんの思い人よ！ デンジャーソースの味、とくと思い知るがいい！ お前の体中からありとあらゆる液体を垂れ流して悶える姿を見ながら、私はトイレに行かせてもらどうぞ！）

少女は音も立てずに弁当箱を開き、ソースを掛けて、鴨を口に運ぶ。

「どう、かな？」

「……………良い味」

少女は、淡々とそれだけ答えた。

（バカなっ！）

思わず、暗黒騎士は振り向いてしまった。

ヘッドフォンを付けた幼い少女は、平然としたまま、ぱくぱくと弁当を食べていく。

（辛さは我慢出来ても、涙は我慢出来なはず！ 辛さに強いのか？）

暗黒騎士は驚愕していた。目を丸く開いて驚きたかったが、涙のせいで開けなかった。それもそのはず。

この弁当は、啓治が食べるつもりだったものだ。

デンジャーソースは使っておらず、昨日暗黒騎士が啓治の家で、エリーとして食べたモノと同じ状態。

「へー、じゃあ私も食べていい？」

マホはどうしても味が気になっていたので、箸を持ったまま立ち上がり、少女のところへ向かった。

「……彼がいいなら」

少女は啓治の顔をじつと見上げて箸を止めた。

「まあ、どうぞ」

「やったー。どれどれー」

マホはぱくりと一口。

「美味っ！ 普通に美味しいじゃん！ やあるうーっ！」  
 ぱしばしと啓治の背中をマホが叩き、彼女なりに褒め称えた。

（どういうことだ？ マホも辛さに強いのか？ それとも本当に激辛ブームが到来してい

たというのか？ ……はっ！ あれにはデンジャァーソースが使われていないのでは！ だとすれば——やはり彼女が本命っ！ 私の分は、罰ゲームだったということか！

暗黒騎士はちらりちらりとマホを見る。

今すぐにも相談をしたかったが——

マホはその少女と赤外線通信でメールアドレスや電話番号を交換していた。

聞くに聞けない。

暗黒騎士は、内気な性格を恨みながら、トイレへと立った。

「はいお疲れー」

啓治が席に戻ってくると、豊が弁当のフタを差し出した。

そこには、豊の弁当から分けられた、ご飯とおかず。

「飯抜きとか言っといて、分けてくれんだな」

「俺だって、人気者になりたいからね」

続きは、11月20日発売のファンタジア文庫で！

©Shinichi Kimura, Alpha 2015